

任せるからこそその入念な準備や苦
 勞を惜しまない末本氏の姿勢がそ
 うした取り組みからよくわかった。
 公式戦であってもベンチ入りする
 選手全員を出場させる方針やスタ
 メンや交代まで小学生の選手たち
 に決めさせる思い切った指導方針
 にも、その背後には様々な工夫や
 努力がある。

種を時き じつくりと時を待つ

失敗や試行錯誤を繰り返してよ
 うやく固めつつある今の指導スタ
 ンスについてこう説明する。

「やはりこちら（指導者）の答え
 と言いますか、こちらがああだ、
 こうだ言うよりも、多分選手それ
 ぞれが持っている考えを引き出す
 というのを一番大切にしています。
 だから、質問の仕方もそうですし、
 こちらがかかる言葉が考えるきつ
 かけ、ヒントとなれば嬉しいです
 から、そのためにも質問の仕方や
 コーチングの勉強をしなくてはい
 けないと思っています。今は、そ
 ういう指導スタンスですし、でき
 るだけ待とうと考えています」
 末本氏が考える「良い指導者」
 とは「選手、子供たちにスイッチ

が入る瞬間、何かをしようとして
 いる瞬間を見逃さない指導者」だ
 という。そこを目指すからこそ、
 日頃から「どれだけ見ているのか
 見えるのか」というところにこだ
 わっている。実際、末本氏のチー
 ムの練習と試合の取材に向くど
 指導の繊細さと同時に、選手自ら
 に考えさせる、任せる指導の大変
 さを目の当たりにした。例えば試
 合において、ある選手がミスを犯
 したとする。そのワンプレーを切
 り取って「どこを見ていたの？」
 「なぜそのプレーを選択したの？」
 と問いつける一方で、プレーが途
 切れることもタイムアウトもない
 サッカーにおいては俯瞰的な目線
 で試合展開を追う必要も生じる。
 であれば、「そこはああしろ」と
 選手に答えを与えた、強要した方
 が指導者にとっても選手にとつて
 も楽なはずだが、末本氏は試合の
 流れを切ることなく選手と個別の
 やり取りを続ける。

そうしたやり取りを繰り返すう
 ちに自然と子どもたちが能動的に
 引き出しを選ぶようになり、最後
 は引き出しを突き破って驚くよう
 なシチュエーションを作り出すの
 だという。それを長期的なスパン

今号の言葉

常識を疑う

指導者としての成長を促した常識を疑う姿勢について、末本氏
 は「いつも自分たちがやっていることを少し疑ってみるべき」
 と語る。例えば、日本の育成現場では試合終了後に挨拶をして
 いるにも関わらず、指導者の指示で再び両チームの選手が集ま
 り、挨拶交換をする場面をよく目にする。逆に「挨拶をしなさい
 」と選手に一切強要することなく、真の挨拶ができる選手や
 チームを育てている末本氏の指導法は多くの指導者にとつて
 一考に値するものだろう。

で見えていくのが末本氏流の指導論
 であり、2月に県大会でベスト4
 入りしたチームはまさに「指導者
 の想像を超える成長を見せたチー
 ム」だった。
 末本氏は、「選手が自分を超え
 る瞬間こそが指導者としての生き
 甲斐」と述べた上で、指導者とし
 ての真の喜びについてこう続ける。
 「自分の中で『この子はこうじゃ
 ないか』と思っていたことが突き
 破られることが実際にあります。
 例えば、卒団から10年経って指導
 者をやっていたり、なでしこ（リ
 ーグ）の選手になっている。関わ

っている当時は考えもしなかった
 ことが実際に起こっています。サ
 ッカーのプレーに関しても、例え
 ば試合で『そこにおいてボールもら
 えるの?』と言ってしまった後で、
 実際にボールが来てしまう。聞こ
 えていないふりをしていいのかわ
 からないですけど、その選手は『も
 らえる』と判断し、実際にパスを
 もらった。そうなる、こちらと
 しては『ごめんなさい』ですよね
 （苦笑）。選手からすれば、『それ
 みる、コーチ』という感じなのか
 もしれないですが、そうしたいい
 意味での期待の裏切り、指導者を

末本亮太のテクニカルアンサー

指導者なら誰でも持つであろう4つの悩みに、今回登場してくれた指導者が回答してくれます。
 今回は末本亮太氏が悩みに答えてくれました。

Q1. なかなか試合で結果を出せない時は どうしますか?

チームには必ず目指すべきものがあるわけですから、
 まずはその中で今できていること、できていないこと
 を自分の中で分析します。次にあえてコーチや他学年
 の担当コーチにチーム状況を見てもらって客観的な意
 見をもらう、試合後に対戦相手の監督にチームの印象
 を聞くこともあります。同時に、子供たちともお互い
 に意思確認をして、現状確認をしていきます。「ここが
 良いから、こうしていかないか?」という作業を入
 れます。辛い時期ですが、そういう時こそ成長すると
 考えています。大切なことはぶれないこと。ぶれない
 と言ってもただ頑固に「こうだ」というのではなく、自
 分自身と向き合うこと、周りの声も聞き入れて竹のよ
 うなしなやかさを持つことを意識しています。

Q3. やる気のない選手がいたら どのように対応していますか?

ジュニア年代ではやる気がないと言っても、種類があ
 ると思います。できるのにサボってしまうタイプの選
 手には、その選手が一生涯懸命やらないとチームが勝て
 ない、どうかなってしまうような環境を作って、そう
 いう状況をあえて作って、やる気を引き出すようなや
 り方をします。以前は、罰的にサッカーをやらせない
 こともあったのですが、そうではないかなと。小学生
 も大人もそうですが、やる気がないのですから、絶対に何
 かあります。それが何なのか、どこなのかをまずはこ
 ちらが見て考え、やる気を引き出すようなきっかけを
 作ることが多いですね。そうすると、反応があります。
 そういう瞬間は指導者として楽しいし嬉しいですよ。

種を時き、選手一人ひとりの成長をじ
 つと見守ることで、彼ら一人ひと
 りが自分の花を咲かせる。今日も
 彼は、地道に開花、収穫のための
 種を蒔いている。

Q2. 選手のミスをもどのように捉えて どう指導していますか?

「何かをする上ではミスは必ず起きるもの」と捉えてい
 ます。逆に「ミスこそが創造性を生む」と考えていま
 すので、そのミスが良いミスになるために選手と以下
 のような問答をしていきます。最初は「今どこを見てい
 たの?」という質問をして見ていたところの確認をし
 ます。その後に「そこを見て、どのように考え、どうして
 そのプレーをしたの?」と聞きます。その上で、どこが
 良くなかったのかを選手自身で考えてもらうようにし
 ます。PDCAサイクル（※計画→実行→評価→改善の4
 段階を繰り返すことにより業務改善すること）ではな
 いですが、選手がそういう考え方を習慣として身に付
 けるようにすることで、最終的にはサッカー以外でも
 そうした習慣が生きてきます。

Q4. チームがうまくまとまらない時は どうしますか?

勝つ確率が高い相手や大会に進んで出て、勝利・優勝す
 ることの成功体験をチームでともに感じるような環境
 設定をすることがあります。あるいは、サッカー以外の
 時間でチームメイトと一緒に過ごす時間を増やしま
 す。例えば、会場までの移動をあえて車にして車内
 の時間を増やしたり、チームでご飯を食べに行ったり、
 ボーリング大会を開催するなど。また、遠征に行った
 際には、試合の合間に全員が絡まなくてはならない時
 間を作り、チームの結束をはかります。サッカー以外
 のチームメイトの意外な一面を見たり、遊びの中で
 様々なものが生まれてくると考えています。そうする
 ことで「この仲間とサッカーがしたい」、「このチー
 ムでもっとやりたい」といった気持ちも芽生えます。

超えてくれる瞬間はやはり楽しい
 です」

現在、40名近い選手を担当しな
 がらも、40人それぞれの成長やサ
 ッカーにおけるステージを考え、
 日夜「プレーヤーズファースト」
 の視点で彼らにサッカーを楽しん
 でもらう、サッカーで人間として
 も成長するための環境を模索する
 末本氏が、選手が変化する瞬間
 というのは「いきなり現れる」と
 語る。「どの瞬間に誰かはわか
 らないですが、突然来ます。本当
 にそこを逃してしまつたらダメな
 ので、そこだけはやはり注意深く
 見ていきます」。だからこそ、選
 手に任せるポトムアップ理論の
 ことをよく知らない周囲から「そ
 の方が楽だろう」と言われること
 について、「そういうふうに見ら
 れるかもしれないですが、全然そ
 んなことはありません」と反論す
 る。その末本氏の言葉を聞きなが
 ら、彼の指導者像は「種を蒔く人
 ではないか」と考えた。地道に種を
 蒔き、選手一人ひとりの成長をじ
 つと見守ることで、彼ら一人ひと
 りが自分の花を咲かせる。今日も
 彼は、地道に開花、収穫のための
 種を蒔いている。